

## 教員のメンタルヘルスに関する研究の展望

八尋, 風太  
九州大学大学院人間環境学府

杉山, 佳生  
九州大学大学院人間環境学研究院

萩原, 悟一  
九州産業大学人間科学部

<https://doi.org/10.15017/4773132>

---

出版情報 : 健康科学. 44, pp.11-17, 2022-03-25. 九州大学健康科学編集委員会  
バージョン :  
権利関係 :

— 総 説 —

## 教員のメンタルヘルスに関する研究の展望

八尋風太<sup>1)</sup>, 杉山佳生<sup>2)\*</sup>, 萩原悟一<sup>3)</sup>

### Perspectives on research on teachers' mental health

Futa YAHIRO<sup>1)</sup>, Yoshio SUGIYAMA<sup>2)\*</sup>, and Goichi HAGIWARA<sup>3)</sup>

#### Abstract

Recently, the mental health of school teachers in Japan has been deteriorating. Teacher mental health can have a significant impact on school education. Therefore, the purpose of this study was to clarify what kind of situation might occur if teachers' mental health continues to deteriorate. We review current research and describe studies that have been done to improve the mental health of teachers, as well as future issues. To date, many studies have been conducted on teachers' mental health related to stress and burnout. Thus, we focused on stress and burnout in overviewing previous studies. Research has shown that the determinants of teacher stress are internal factors such as age and personality and external factors such as the work environment and human environment. Previous studies have shown that determinants of teacher burnout are individual differences such as personality and teacher history and situational factors such as teacher culture and responsibility. Regarding the outcome of teacher stress and burnout, it has been clarified that teacher stress not only deteriorates the mental health of teachers themselves but also hinders the education of students. Although social support effectively prevents the deterioration of teachers' mental health, it has been pointed out that it is not easy for teachers to support each other. Future longitudinal and qualitative research is needed to understand teachers' mental health from various perspectives. Moreover, studies should clarify the status of teachers' mental health and preventive factors that facilitate intervention in the field.

**Key Words:** stress, burnout, social support, review

(Journal of Health Science, Kyushu University, 44: 11-17, 2022)

---

1) 九州大学大学院人間環境学府 Graduate School of Human-environment Studies, Kyushu University, Japan.

2) 九州大学大学院人間環境学研究院 Faculty of Human-environment Studies, Kyushu University, Japan

3) 九州産業大学人間科学部 Faculty of Human Sciences Studies, Kyushu Sangyo University, Japan

\*連絡先: 九州大学大学院人間環境学研究院 〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744 Tel&Fax: 092-802-5162

\*Correspondence to: Faculty of Human-environment Studies, Kyushu University 744 Motoooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan  
Tel&Fax: +81-92-802-5162 E-mail: sugiyama@ihs.kyushu-u.ac.jp

## 1. はじめに

わが国における学校教員の精神的健康状態は悪化している。2016年の文部科学省が実施した「教員勤務実態調査<sup>1)</sup>」において、中学校の教諭に対して精神心理的ストレス反応を評価する尺度を用いて調査した結果、校長、副校長、教頭を除く一般教諭は平均値において高ストレス状態にあることが示唆された。文部科学省が2018年に公立の小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校における教職員を対象に行った「教育職員の懲戒処分等の状況調査<sup>2)</sup>」によると、2018年度中に病気で休職した公立学校の教員は7949人であり、そのうち約66%にあたる5212人がうつ病などの精神疾患を理由に休職している。公立中学校では、2044人の休職者のうち1361人が精神疾患のために休職をしている。2008年度以降は、精神疾患による休職者が5000人前後で停滞しているが、2001年度は2503人であったことから、最近では精神科医の医療への抵抗が減って、多くの教員が医療を受ける傾向にあることを加味しても、高水準で推移していることは明らかである。「学校教育は、教職員と児童生徒との人格的な触れ合いを通じて行われるものであることから、教職員が心身ともに健康を維持して教育に携わることができるようにすることがきわめて重要である<sup>3)</sup>」と述べられているように、教職員のメンタルヘルスは、学校教育全体に大きな影響を与える可能性がある。

以上のような状況が続く、教員のメンタルヘルスが悪化の一途をたどればどのような状況に陥る可能性があるのか。また、改善するためには現段階でどのような検討がされているのかをこれまでの研究を概観し、今後の課題と合わせて明らかにすることを本論文の目的とする。

## 2. 教員のメンタルヘルスについて

教員のメンタルヘルスについては、「児童心理」の1987年10月号に掲載され、その後多くの学術誌などで書かれてきた。また、「教員のメンタルヘルス」をタイトルに含んだ研究論文は1990年代後半からであり、その歴史は比較的浅いといえるであろう。これまで、教員のメンタルヘルスについて、ストレスやバーンアウトと関連させた研究が多く行われてきた。

## 3. 教員ストレス

### 3. 1 教員ストレスの定義

教員は前述したように、一般的にストレスの強い職業であるといわれている。教員のストレスは「教員の仕事上で起こりうる自身の不愉快な情動<sup>4)</sup>」と定義されている。教員のような人を対象とし、人に接し、人に影響を与える職業は、そうでない職業と比較して、ストレスが蓄積しやすいとされており、教員は対人関係の多様さ、影響力の大きさから、対人的な他の職業よりも、極めてストレスの強い職種と指摘されている<sup>5)</sup>。

### 3. 2 教員ストレスの規定要因

教員のストレスを規定する要因は内的要因と外的要因が挙げられ、内的な要因として個人属性や性格特性が教員のストレスに及ぼす影響について検討がされている。後藤・田中<sup>6)</sup>は、女性教員のストレスの特徴を検討した結果、小学校教員においては年代が上がるにつれてストレス度は高くなり、中学校教員においては、20代30代と高くなり40代になると低下するといった年齢とストレスの関連を示した。そのほかにも、性別・年齢・教職経験年数などのような個人の属性<sup>7)</sup>や、教員個人の教育観<sup>8)</sup>や、職務意識<sup>9)</sup>との関連性が認められている。

外的要因としては、教員のストレスのうち9割以上は職場内におけるもの<sup>10)</sup>という報告がされている。また教員のストレス過程メカニズムを明らかにするため、小・中学校の教員質問紙調査を行い、検討した結果、生徒との関係上発生するストレスが教員の心身の不健康の大部分を占めている<sup>11)</sup>といった指摘がされている。竹田ほか<sup>12)</sup>は教員のストレスを検討した結果、「児童・生徒」「保護者」「同僚」「教育行政」が高く評価されていたことが示された。また、保護者との教育に関する考え方のずれを認知している教員は、ストレスが大きいことが明らかにされた<sup>13)</sup>。相川<sup>5)</sup>は、教員のストレスの原因として、休息する場所がないといった施設・設備の不備などの職場環境を挙げていた。

教員のストレスの原因となるストレスについて、田中ほか<sup>14)</sup>は、「教員との関係」「猥雑な仕事」「多忙」「児童生徒との関係」「教師からの評価」「部活動指導」「校務分掌」「保護者からの評価」「個別指導」に分類している。教員のストレスは多岐にわたっており、授業以外に様々な仕事を抱えていることを示している。これらの仕事の負担感が許容量を超えた時に、やりがいのある仕事が一転してストレスフルな仕事に転じる可能性が考えられる。

### 3. 3 教員ストレスのアウトカム

伊藤<sup>15)</sup>は、教員が教育現場から受けるストレスは教員のやる気の低下や、抑うつ状態に近い消耗感を招くとともに、そのストレスによってとった教員の不適切な態度や行動が、子どものストレスや問題行動を導くという悪循環を危惧している。また、教員のストレスは、教員の健康だけでなく、生徒の心にも影響を及ぼし、人間関係を悪化させる可能性が報告されている<sup>16)</sup>。金川<sup>17)</sup>は、教員が教育現場で精神的に不安定な状態に陥った場合、教員としての適切な態度や、生徒との良好な人間関係の構築に支障が生じ、授業をはじめとした教育活動の停滞や、それまでに築いてきた児童・生徒との関係を維持できなくなる可能性を指摘している。

以上のように、教員のストレスは教員自身における心の健康の悪化だけでなく、生徒の教育に支障をきたすことが示されていることから、教育の視点からもストレスを予防することが必要である。

## 4. 教員バーンアウト

### 4. 1 教員バーンアウトの定義

教員のような対人援助職を対象としてストレスの程度を検討する場合、対人援助職に特有の職業的ストレス反応とされるバーンアウトに焦点が当てられている<sup>18)</sup>。また、精神疾患が原因による休職する教員が増加していることからバーンアウトに着目した研究が行われている。バーンアウトは「燃え尽き症候群とも言われており、ストレスによる日常業務で疲れ果て、燃えついた状態」と定義されている<sup>19)</sup>。また、Maslach<sup>20)</sup>は「長期間にわたり人を援助する過程で、心的エネルギーがたえず過度に要求された結果、極度の心身の疲労と感情の枯渇を主とする症候群であり、卑下、仕事嫌悪、思いやりの喪失をきたした状態」という定義をしている。バーンアウトは脱人格化、情緒的消耗感、個人的達成感の低下という3つの下位概念から構成されている。脱人格化は関心や配慮の低下を主とした症状であり、業務に対するネガティブな態度である。情緒的消耗感は心理的な疲労感で、バーンアウトの中心的な症状であり、個人的達成感の低下は仕事を成し遂げたあとの達成感や充実感が得られないことを示す<sup>21)</sup>。

教員におけるバーンアウトについて、新井<sup>22)</sup>は「教師が理想を抱き真面目に仕事に専心する中で、学校のさまざまなストレスにさらされた結果、自分でも気づかぬうちに消耗し極度の疲弊をきたすにいたった状態

と定義している。また、谷島<sup>23)</sup>は「長期間にわたるストレスの結果、慢性的な情緒的消耗感の状態に陥り、同時に同僚や児童・生徒との関わりを避けるようになり、達成感を味わうことができなくなる状態」と定義している。教員バーンアウトにおいても3つの下位概念で構成されている。脱人格化は、生徒の人格を無視した思いやりのない対応であり、情緒的消耗感は授業や生徒指導などの仕事を通じて、情緒的に力を出し尽くして消耗してしまった状態である。個人的達成感の低下は、職務における達成感が低下した状態である<sup>24)</sup>。教員のバーンアウト率は、他職種の2~3倍高いとされている看護師のバーンアウト率より高いことが報告されている<sup>25)</sup>。

### 4. 2 教員バーンアウトの規定要因

バーンアウトを規定する要因について、個人差要因と状況的要因が挙げられる。個人差要因として、自己関与の高い人<sup>19)</sup>や理想主義的情熱を持っている者<sup>26)</sup>はバーンアウトしやすい性格特徴として示されている。また、小学校・中学校・高等学校の間にバーンアウト度の違いは見られなかったものの、男性に比べ、女性はバーンアウト度が高いことを示した<sup>27)</sup>。伊藤<sup>28)</sup>は20、30代の若手群が40代以上のベテラン群よりバーンアウトの度合いが高いことを報告している。小中学校教員において、若い教員ほど、また女性の方がバーンアウトしやすいことが明らかにされている<sup>29)</sup>。新井<sup>30)</sup>は、教員のような対人援助職は理想に燃え、自己関与しなければ勤まらない仕事であるが、対人援助職に適性を持つからこそバーンアウトしやすいパラドックスを指摘している。

状況的要因として、教員の仕事は切れ目がなく、明確な休憩時間もないものであるにもかかわらず、担任役割など仕事の責任は重く、心的エネルギーが絶えず過度に要求されやすいため教員の仕事自体バーンアウトを起こしやすい特徴を持っていると指摘されている<sup>31)</sup>。友田・木島<sup>32)</sup>は、高校教員を対象に、どのような出来事に対してストレスを感じ、ストレスがバーンアウトに与える影響を検討した結果、「自分の意に反すること」に関する出来事を経験した教員はストレスを感じやすく、このようなストレス度が高いとバーンアウトが発生しやすいことが明らかにされている。貝川・鈴木<sup>33)</sup>は、学校組織特性である「協働性」や「職務満足」がバーンアウトに影響を与えていることを示した。高木・田中<sup>34)</sup>は、共分散構造分析を用いて、教員のバーンアウト

トモデルの検討を行った結果、バーンアウトに直接影響を及ぼしているのは職務自体のストレスであり、同僚との関係などの職場環境のストレスは間接的な影響を及ぼすのにとどまっていた。また、人を教え導く立場として疲れを口にしたり、人から援助を受けたりすることは恥であるという「教師文化」も教員のバーンアウトと関係している。教員の職務や「教師文化」の中にストレスを生みやすく、ストレスを緩和しにくい構造が内包されていることが明らかにされている<sup>35)</sup>。このような文化に加えて、現代の教員は行政上の仕事が多く、生徒との関わりが減少することで教員としてのアイデンティティを揺るがし、職務継続の熱意を減退させているといわれている<sup>35)</sup>。久富<sup>36)</sup>は、かつて、教員は生徒のためには苦勞をいとわない「献身的教師像」を追い求め、その忙しさの中で教員としての職業的アイデンティティを見出していたが、近年は、「献身的教師像」が生徒や保護者と共有されず、生徒のために働いている実感を得ることが困難であるために、教員としての職業的アイデンティティを満たすことができなくなっていると指摘している。そして、職業的アイデンティティを見出せないことが、疲労の蓄積から疲弊へ、疲弊から燃え尽きへと追い詰められることが報告されている。教員としての職業的アイデンティティを形成・確立する中で、それまでの教育観で対処できない事態や、生徒や同僚との関係がうまくいかなくなる事態を経験することで、アイデンティティの「危機」を起し、その「危機」が時にバーンアウトに繋がることを指摘されている<sup>37)</sup>。

#### 4. 3 教師バーンアウトのアウトカム

バーンアウト状態になると、強い自己嫌悪や無力感に陥り、人への思いやりを捨ててしまうため、生徒への関わりが機械的で表面的なものとなり、皮肉な対応になってしまうことがあるとされている<sup>22)</sup>。また、鈴木<sup>38)</sup>は、バーンアウトの高い教員ほど管理職や同僚との人間関係が悪化していることを明らかにした。平岡<sup>39)</sup>は、教員のバーンアウトとある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知である教師効力感<sup>40)</sup>の関係について検討した結果、バーンアウト度の高い教員は教師効力感が低下している傾向にあることを示唆した。教師効力感とは、生徒の内発的動機づけや学業への積極性の強さ、あるいは学業達成のレベルの高さなどとも関わっている<sup>41)42)</sup>ことから教員のバーンアウトの予防が教育の質の向上に繋がると述べた。

## 5. 教員のメンタルヘルスを予防する要因

教員のバーンアウトを予防する要因として、ソーシャルサポートが有効であると多くの研究で指摘されている。貝川<sup>43)</sup>はソーシャルサポートとバーンアウトの関連を検討した結果、困難を抱える人を励ましたり、共感したり、的確に評価したり、自尊心を支えたりするような支援である情緒的サポートを得ることで、バーンアウトを緩和できるが、金銭的、物質的な援助をしたり、情報提供やアドバイスをしたりするような直接的な支援である道具的サポートは影響しないことを明らかにした。職場の同僚からの援助を受けることがバーンアウト対策のための方略として有効であることが報告されている<sup>44)</sup>。また、中学校教員においては、管理職からのソーシャルサポートがバーンアウト傾向の軽減に有効という結果が得られた<sup>45)</sup>。Russell et al.<sup>46)</sup>は、公立小・中学校教員を対象にして、バーンアウトに対するソーシャルサポートの効果を検討した。上司、同僚、配偶者、友人(または親戚)の4名のサポートのうち、上司からのサポートを多く受け取っている教員ほどバーンアウト傾向にないことが明らかにされている。谷口・田中<sup>47)</sup>は、上司および同僚から受け取るサポートが教師効力感を高め、バーンアウトを抑制させる効果を持つことを示している。

以上のように、ソーシャルサポートは教員のメンタルヘルスの予防に有効であることが指摘されているが、実際に教員が相互にサポートし合うのは容易ではない。落合<sup>35)</sup>は、教員にとってソーシャルサポートは重要ではあるが、多忙により相談しづらく、個人的な付き合いも減少しているのが現状であり、他の教員をサポートしている余裕がないことが報告されている。

## 6. 今後の課題

多くの先行研究において、課題として取り上げられているのは縦断的検討の必要性である。特にバーンアウトは一般的なストレスと比較して、長期的なプロセスであり、抑うつよりも多面的で、専門職の特徴などを反映した特殊な一類型といわれている<sup>48)</sup>。したがって、縦断的に教員のバーンアウトを検討することでプロセスなどを明らかにすることができると考えられる。

また、質的研究の必要性も指摘されている<sup>35)</sup>。わが国における教員のバーンアウト研究はほとんどが量的研究によって行われており、質的研究からの知見が不足していると考えられる。前述した縦断的研究において、質的研究を採用することで教員のバーンアウトを

より多角的に捉えることができるであろう。

制度や文化的視点からの検討も不可欠である。教員のバーンアウトは、教育制度や教育文化と関係しており、日本特有の制度であれば部活動が特徴的であると考えられる。日本では、教員が部活動の指導を行うことが多く、負担になっていることが指摘されているが、このような研究はほとんど見受けられない。部活動におけるどのような点がメンタルヘルスに影響を与えているのか、あるいはどのような教員が部活動を負担と感じ、メンタルヘルスに悪影響を及ぼしているかなどを検討し、新たな知見が得られることが期待される。

メンタルヘルスの予防要因として、ソーシャルサポート以外の要因を模索する必要があるだろう。前述したように、近年の教員は多忙であることから、ソーシャルサポートを相互に行う余裕がなく、学校現場への組織的介入は難しいと考えられる。学校の環境や制度からの視点で検討する必要があるといえる。

## 7. おわりに

本研究の目的は、教員のメンタルヘルスが悪化の一途をたどればどのような状況に陥る可能性があるのか、また、改善するためには現段階でどのような検討がされているのかをこれまでの研究を概観し、今後の課題と合わせて明らかにすることであった。

教員のメンタルヘルスが悪化することで、教員の健康だけでなく、生徒の教育に悪影響を及ぼすことが明らかにされているため、登校拒否の生徒の増加や学力低下に繋がると考えられる。また、教員のメンタルヘルスを改善する要因として、主にソーシャルサポートを用いて検討されていたが、学校現場では取り入れることが難しい環境であり、実際に精神疾患の人数も高い水準を維持している。教員一人一人がストレスに対して適切に対処する必要があるが、それ以上に学校という組織全体で職務の改善や職場環境の見直しをすることが重要であると考えられる。そのために、本論における課題で述べたような研究を進め、教員のメンタルヘルスの実態を明らかにし、現場に介入しやすい予防策を明らかにすることが期待される。

## 引用文献

1) 文部科学省 (2016) 教員勤務実態調査 (平成 28 年度) の集計 (速報値) について (概要). [2021 年 11 月 26 日閲覧], 文部科学省 : [http://www.mext.go.jp/b\\_](http://www.mext.go.jp/b_)

menu/houdou/29/04/\_icsFiles/afieldfile/2017/04/28/1385174\_002.pdf.

2) 文部科学省 (2018) 平成 30 年度公立学校教職員の人事行政状況調査について. [2021 年 11 月 26 日閲覧], 文部科学省 : [https://www.mext.go.jp/content/20191224-mxt\\_zaimu-000003245\\_10103.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20191224-mxt_zaimu-000003245_10103.pdf).

3) 文部科学省 (2013) 教職員のメンタルヘルス対策について (最終まとめ). [2021 年 11 月 26 日閲覧], 文部科学省 : [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2013/03/29/1332655\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/03/29/1332655_03.pdf).

4) Kyriacou, C. (1987) Teacher stress and burnout: An international review. *Educational Research*, 29: 146-152.

5) 相川勝代 (1997) 教師のストレス. 長崎大学教育学部教育科学研究報告, 52 : 1-13.

6) 後藤靖宏・田中妙 (2001) 女性教師のストレスの特徴—小学校・中学校の場合—. 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 23 (1) : 127-136.

7) 秦正春 (1991) 教師のストレス. 福岡教育大学紀要, 40 (4) : 79-146.

8) 伊藤美奈子 (1995) 教師の生徒観・教師観に関する一考察—理想の教師像による 6 タイプ間比較—. 神戸国際大学紀要, 49 : 26-34.

9) 岡東壽隆・鈴木邦治 (1990) 教師のバーンアウトに関する研究 (I). 中国四国教育学会教育学研究紀要 : 349-359.

10) 中島一憲 (1996) 教職員のメンタルヘルス 中島一憲・土井健郎 (監)・児玉隆治・高塚雄介 (編). 学校メンタルヘルス実践事典, 日本図書センター:695-704.

11) 高木亮 (2003) 教師のストレス過程メカニズムに関する比較研究—小・中学校教師のストレス過程モデルの比較を中心に—. 日本教育経営学会紀要, 45 : 50-62.

12) 竹田真理子・坂田真穂・菅千索・菅眞佐子・山本岳・菅佐和子 (2010) 教師のストレス. について (1) —質問紙調査の分析から—. 和歌山大学教育学部紀要教育科学, 61 : 119-126.

13) 照井康幸・増田真也 (1999) 保護者を要因とする教師のストレスに関する研究. 茨城大学教育実践研究 (18) : 29-41.

14) 田中輝美・杉江征・勝倉孝治 (2003) 教師用ストレスサー尺度の開発. 筑波大学心理学研究, 25 : 141-148.

15) 伊藤美奈子 (2007) 教師のうつ病の理解と援助. 広

- 島大学心理臨床教育センター紀要, 6 : 18-22.
- 16) 斉藤浩一 (2004) 中学校教師ストレスの構造的循環に関する実証的研究. 東京情報大学研究論集, 8 (1) : 21-28.
- 17) 金川悟 (2009) 教師のモチベーションとメンタルヘルスの関係—不安と抑うつに焦点をあてて—. 兵庫教育大学大学院学位論文.
- 18) 森慶輔 (2007) 公立中学校教員のバーンアウト・プロセスモデルの検討. 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要, 16 (2) : 61-72.
- 19) Freudenberger, H. J. (1974) Staff burnout. *Journal of Social Issues*, 30: 159-165.
- 20) Maslach, C. (1982) *Burnout: The cost of caring*. New Jersey: Prentice-Hall.
- 21) Maslach, C & Jackson, S. E. (1981) The measurement of experienced burnout. *Journal of Occupational Behavior*, 2: 99-113.
- 22) 新井肇 (2002) 教師バーンアウトの「なぜ」と「どうする」. *労働の科学*, 57 (4) : 14-17.
- 23) 谷島弘仁 (2009) 教師バーンアウトの因子構造に関する検討: 日本語版 Maslach Burnout Inventory を用いて. 「人間科学研究」文教大学人間科学部, 31 : 77-84.
- 24) 久保真人 (2004) *バーンアウトの心理学*. サイエンス社: 東京.
- 25) 宗像恒次・椎谷淳二 (1986) 中学校教師の燃え尽き状態の心理社会的背景. *精神衛生研究*, 33 : 129-153.
- 26) Bramhall, M., & Ezell, S. (1981) How burned out are you?. *Public Welfare*, 39: 23-27.
- 27) 大阪教育文化センター教師の多忙化調査研究会 (編) (1996) 教師の多忙化とバーンアウト—子ども・親との新しい関係づくりをめざして—. 法政出版: 京都.
- 28) 伊藤美奈子 (2000) 教師のバーンアウト傾向を規定する諸要因に関する探索的研究. *教育心理学研究*, 48 : 12-20.
- 29) 松本良夫・河上婦志子 (1994) *逆風の中の教師たち*. 東洋館出版社: 東京.
- 30) 新井肇 (1999) 「教師」崩壊—バーンアウト症候群克服のために—. すずさわ書店: 埼玉.
- 31) 上野和久・佐藤史人 (2010) 現代日本におけるバーンアウトの研究の動向に関する研究—バーンアウトの教員への適応を目指して—. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 20 : 143-150.
- 32) 友田貴子・木島伸彦 (2007) 高校教員のストレスと精神的健康に関する研究. 埼玉工業大学人間社会学部紀要, (6) : 17-24.
- 33) 貝川直子・鈴木眞雄 (2006) 教師バーンアウトと関連する学校組織特性, 教師自己効力感. 愛知教育大学研究報告, 55 : 61-69.
- 34) 高木亮・田中宏二 (2003) 教師の職業ストレス—教師の職業ストレスとバーンアウトの関係を中心に—. *教育心理学研究*, 51: 165-174.
- 35) 落合美貴子 (2003) 教師バーンアウトのメカニズム—ある公立中学校職員室のエスノグラフィー—. *コミュニティ心理学研究*, 6 : 72-89.
- 36) 久富善之 (1998) 教師の生活・文化・意識—献身的教師像の組み換えに寄せて—教師像の再構築. 岩波書店: 東京. 76-77.
- 37) 川原茂雄 (2003) 教師アイデンティティの「危機」と教師教育の課題. 日本教育学会大会研究発表要項, 62 : 295-298.
- 38) 鈴木邦治 (1992) 教師のバーンアウトに関する研究 (III) —バーンアウト症候の構造的要因をめぐって—. 広島大学教育学部研究紀要, 41 : 183-190.
- 39) 平岡永子 (2001) 教師バーンアウトの一考察. 関西学院大学臨床教育心理学研究, 27 (1) : 1-9.
- 40) 坂野雄二 (1989) 一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討. *早稲田大学人間科学研究*, 2: 91-98.
- 41) Woolfolk, A.E. & Hoy, W.K. (1990) Prospective teachers sense of efficacy and beliefs about control. *Journal of Educational Psychology*, 82: 81-91.
- 42) 前原武子 (1994) 教師の効力感と教師モラル, 教師ストレス. 琉球大学教育学部紀要, 44 : 333-342.
- 43) 貝川直子 (2009) 学校組織特性とソーシャルサポートが教師バーンアウトに与える影響. *パーソナリティ研究*, 17 (3) : 270-279.
- 44) 中川剛太・小谷英文・西村馨・井上直子・西川昌弘・能幸夫 (2000) 教師の対人ストレス方略の臨床心理学的研究 (1) —実態調査にもとづく基礎研究—. *国際基督教大学学報教育研究*, 42 : 101-123.
- 45) 宮下敏恵 (2008) 小・中学校教師におけるバーンアウト傾向とソーシャル・サポートとの関連. *上越教育大学研究紀要*, 27 : 97-105.
- 46) Russell, D.W., Altmeyer, E. & Van Velzen, D. (1987) Job-related stress, social support, and Burnout among classroom teachers. *Journal of Applied Psychology*, 72 : 269-274.
- 47) 谷口弘一・田中宏二 (2011) 教師におけるサポート

の互惠性と自己効力感およびバーンアウトとの関連.  
長崎大学教育学部紀要－教育科学－, 75 : 45-52.

－その概念を中心に－. 早稲田大学教育学部学術研究 (教育心理学編), 47 : 57-72.

48) 荻野佳代子 (1999) バーンアウト研究の課題と展望